



負け犬はワルツを

上手く踊れない

『負け犬はワルツを上手く踊れない』 目次

本編

第1話：マンホールに落ちたら異世界でした

6

第2話：お約束のライバルに出会いました

27

第3話：凹んだりもするけれど、アタシは大体元気です

52

第3.5話：アタシたちは二人で一つだった……かもしれない

79

第4話：放蕩長男と共にラスポスがやって来ました

97

第5話：物語はハッピーエンドと相場が決まっています

123

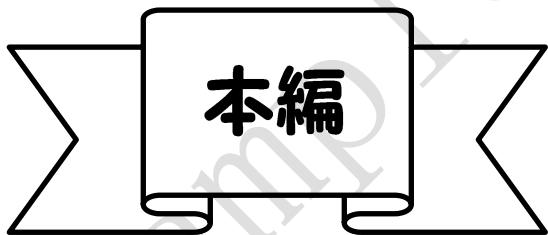
番外編：お中元にもつつよつなのお菓子の

アラカルトみたいなお話たち 1〜7

158

後日談：二〇一九年・初夏、『なか丑』のからあげを買い

192



第1話：マンホールに落ちたら異世界でした

1

「お前、つままないんだよ」

二十九歳の誕生日直前。その一言で、アタシの恋は終わった。

クリスマスを前に、街は色とりどりのイルミネーションがきらめき、店先には、クリスマス用品が賑やかに並ぶ。そんなきらびやかな情景とは裏腹に、アタシの心はドン底まで暗かった。

五つ年上の彼は、バイト先の店長。一緒に仕事をするうちに、何度か呑みに行くようになって、ふと気がついたら、恋人同士のようなカンケイになっていた。

ところが、それから半年も経たないうち。

新しく入ってきた大学一年の女の子に、彼のハートはあつと言う間に傾いた。

キャピキャピの若い子の方がカワイク見えるのは、わかるわよ。だからって「つまんない」は無
いじゃない！

年末の誕生日を盛大に祝ってもらいたくて、超大手テーマパークのツアーチケット、二人分
用意したのに。年齢に焦りを感じていたなんて認めたくないけど、少し、少しだけよ、結婚まで意
識していたのに！

手にした携帯を見る。失恋報告をした友人からのメールは一言、そっけなく、

「ちゃんとつかまえておかなかったアンタが悪い」。

……友情に疑問を覚えた。

もうバイトにも行けないな。新しい仕事を探さなきゃ。とぼとぼ歩きながら、乙女に似合わぬデ
カイ溜息ひとつ、ついた時だった。

『……………ハ……………巫女よ……………』

どこからともなく聞こえてきた声に、空耳かと思ひ、うつむいていた顔を上げる。商店街を過ぎて住宅街に入ったところ。夜九時を回った道には、人通りも無い。

もしかして……ストーカー？

一人青ざめたとき、さっきよりも明瞭に声は聞こえた。

『どうかこの呼び声にお応えください、戦巫女よ！』

何事!? と一歩後ずさった瞬間、足元に地面は無かった。

何故か蓋が開いていたマンホールに、アタシは飲み込まれた。

『負け犬寸前、失恋して下水に投身自殺？』

すさまじくかつこ悪い、スポーツ新聞記事のようなタイトルが脳裏を駆け巡る。

暗闇の中を、落ちて、落ちて……。

ただどいつまで経っても、頭を強く打ちつけるだろうコンクリートの床はやって来なかった。

2

どっすん。

「あいだーッ!!」

背中から落ちた衝撃に、乙女にあるまじき悲鳴をあげてしまった。

頭がぐわんぐわんして、しばらく動けない。ようやく痛みがひき、両手をついて上体を起こすと、

そこは、コンクリでこそなかつたが、随分と高価そうな大理石の床だった。そりゃ、こんなところに身体打ちつけたら痛いわ。

そんな事を考えていたら、ふと目の前に影がおちて、

「ああ、巫女様！」

やったら可愛らしい声が、頭上から降ってきた。

「わたくしの呼びかけに応えてくださったんですね、戦巫女様！」

は？ イクサミコ？

顔を上げると、いつの間にかアタシの前に立っていた、声に違わず可愛らしい顔をした女の子は、びくつと身をすくませた。アタシが怪訝そうに下から見上げたので、かなりおっかなく見えてしまつたらしい。

「ああ、ゴメンゴメン。驚かせるつもりは無かつたんだけど」

言いかけてアタシは、異常事態に気がついた。

アタシはマンホールに落ちたはずだ。しかしそこは下水道なんかじゃなく、背中から落ちた大理石の祭壇がこしらえられ、綺麗なステンドグラスの窓から暖かな光が差し込んでいる。まるで、ドキュメンタリーや国営放送の世界遺産紹介番組なんかに出てきそうな、外国の神殿のような造りだつた。

さらに驚いたのは、女の子の格好。どこかのお姫様みたいに浮世離れた服を着込んでいる。

何より、髪と目の色。青い髪に金色の瞳なんて。まるで、何かのゲームのキャラみたいな配色じゃない！

呆然としていたら、バン！ と扉が開かれる音がした。

「成功したのか、リーティア！」

「お兄様」

女の子が振り返った方向につられて目をやる。

靴音高く入ってきたのは、これまたどこぞの騎士みたいな軍服に身を包んだ、背の高い男。お兄様と女の子が呼んだが、まったく似ていない。束ねた長い青の髪と、切れ長の金色の目が、かろうじて血の繋がりを示すんじゃないかってくらい。でも、妹に負けず劣らず、ドキドキするくらい的美形だった。悔しいが、アタシより美人。

ところが、その美人兄さん。アタシの前に立って、まじまじとこちらの顔を覗き込んだかと思うと、ふっと目を逸らし、もんのすごいガツカリした表情でボソッと洩らしやがった。

「何だ、戦巫女はこんなに年増なのか」

「ずど——ん！」

そんな効果音が聞こえてきそうなくらい、アタシの頭は噴火した。

「な……っ、何よ年増って！ アタシはまだ二十八よ！」

「二十八!？」

相手が金色の目を細める。

ふふん。アタシはバイト先でいつも、お客さん達の年齢当てゲームの引き合いに出されるくらい、歳より若く見えるって評判だったんだからね。不敵に笑うと。

「じゅうぶん年増だ」

ちゆど——ん!!

「しよっ、初対面に年増だなんて言われたくないわよ！ 大体あんただって、同じくらいの歳に見えるでしょうがっ！」

「俺は二十六だ！」

「大して変わらないじゃない！」

「お、おやめください、戦巫女様、お兄様も！」

そのままつかみかかるんじゃないかってくらいガンを飛ばしあっていたアタシ達の間、リーテイアと呼ばれた女の子が割って入る。

それでお互い、フン、と顔をそむけたところで、アタシは根本的な疑問を思い出した。

「そういえば、ここはどこなの？ 戦巫女って何なのよ？」

するとリーティアは、途端に居住まい正して、アタシに向かってひざまずき、深々と頭を下げるのだった。

3

「突然の召喚の上に、このような無礼、どうかお許しください。わたくしはフォルティア王国第一王女、リーティア・イェルン・フォルティア。こちらが兄の第二王子、フェルナンド・フェイト・フォルティア」

さらりと流れる髪と一緒にこうべを垂れて、リーティアは名乗った。

「わたくし達フォルティアの民は、長い間、あなた様のご降臨をお待ちしていました」

フォルティア？ そんな国、高校の地理で習わなかったぞ。アタシがまた難しい顔をすると、リーティアは顔を上げ、はきはきと告げる。

「ここフォルティアは、あなた様のお生まれになった世界とは、異なる次元に存在する国。そして、

この地には古くより、国が危機に陥った時、女神アリスタリアに選ばれし戦巫女が異世界から訪れる、という伝説があり、実際に過去にも幾度か、戦巫女様がご降臨されました」

一気にまくしたてられて理解がおっつかない。アタシが必死に思考する間に、リーティアは続ける。

「フォルティアの姫は代々、戦巫女様を召喚し、お仕えする役目を担っております。わたくしの代で戦巫女様が現れた事、大変光栄に思います」

もう泣き出すんじゃないかってくらい目をウルウルさせて、リーティアはアタシを見つめてくる。それに気圧されて思わず忘れそうになったが、大事な事は忘れなかった。

「ちよい待ち。『国が危機に陥った時』って言ったわよね。って事はアタシは、その危機とやらを救わなきゃいけない訳？」

「そうだ」

今度はリーティアじゃなくて、フェルナンドと紹介された兄貴の方が答えた。偉そうに腕組みしながら。

「ここ数年、フォルティアには魔物があふれている。奴らは日ごとに凶暴さを増し、昼夜を問わず街や村を襲い、国の騎士団だけでは最早対応しきれない。北の地に封じられていた、凶悪な魔族が復活したとの噂もある。それを鎮められる力を持つのが戦巫女だが……」

そこで言葉を切り、横を向いてまたボソつと。

「……本当に大丈夫なのか？ こんな若くない戦巫女は前代未聞だぞ」

「お兄様つたら！ 女神アリストリア様の選定に間違いはございせん！」

リーティアがふうと頬を膨らませて、兄貴を黙らせる。しかしアタシはそれどころではなかった。

「魔物？ 魔族？ ご冗談。アタシは平凡な小市民よ。そんなゲームの中の話みたいな力、ある訳無いじゃない」

そう、これはきつと夢。夢なんだ。ぎゅーつと自分の頬を引っ張る。

……痛い。

そういえば、さつきも背中から落ちて痛かったわ。

ならばせめて、知り合いに連絡を取って迎えに来てもらおうと、手の中に残っていた携帯を開く。

……画面の左上には『圏外』の二文字が無情に表示されていた。

「今はまだ、困惑なさるのも無理は無いかと思えます」

呆然とするアタシの耳にリーティアの声が届く。

「ですが、戦巫女様が女神の加護を受けたのは事実。いつかそのお力に目覚める日がきつと来るでしょう」

それから、嬉しそうにぼん、とひとつ手を打って、またぼかーんとしたままのアタシの腕を取る。

「とにかく今は、フォルティアの民に戦巫女様がご降臨された事を知らせましょう！ ささやかですが、宴を開かせていただきます」

そこで初めて思い出したように、可愛らしく小首を傾げて、金色の瞳でアタシの顔を覗き込む。

「そういうえば、戦巫女様のお名前をおうかがいしていませんでした。教えてくださいますか？」

「アタシ？ 蓮子。矢田蓮子」

途端にフェルナンドが眉間に皺を寄せた。

「やだレンコン？」

……来たよ。

小さい頃からこのネタで何度からかわれたことか。いつの間にか慣れたけど、なんか、この男に言われると改めてムカっ腹が立つ。

「レンコン女か。ぴったりだな」

「何よ、そっちの名前だってイニシャルFFFで、有名ゲームのパチモンみたいじゃない！」

「何訳のわからない事を言っている」

「ああもう、おやめください、お二人とも……！」

リーティアが止めに入る。アタシとフェルナンドは、プイッとあさつての方向を向いた。

こいつとは絶対に気が合いそうにない。そう思った。

4

優雅な音楽が流れる中、着飾った紳士淑女が手を取り合い、踊る、踊る。

リーティアは「ささやかですが」とか言ったけど、そんなもんじゃなかった。「戦巫女様のご降臨を祝した」ダンスパーティーは、そりやもう盛大に開かれた。

フォルティアの首都、フェーブル城の大広間には、これでもかかってくらいの方が集まっている。アタシはパーティーなんて出たことないから、基準がわからないけれど、出席者の人数もダンスを演出する楽団の規模も、相当なもんじやないだろうか？

アタシはそんな大広間の隅っこで、ちよこんと突っ立って、ブッフエスタイルの食事をつまみつまみしていた。とは言っても、生まれて初めてのドレスを着るために締められたコルセットが苦しいわ、少しかけ結婚式を意識して伸ばしていた髪を結び上げられて顔が突っ張ってるわ、周りの好奇の視線が痛いわで、味も量も、ほとんどわからないんだけど。

海鮮のパスタを喉につまらせて、ゴホゴホ咳き込む。すると。

「何をしているんだ、レンコン女」

意地の悪い声と共に、ジュースの入ったグラスが目の前に突き出された。

正装したフェルナンドから、無言でグラスを奪う。ごきゅごきゅ飲みながら横目で彼を見た。

悔しいが、カッコイイ。昼間の軍服姿も似合っていたが、王子様らしい格好をして、マントを羽織った姿もイイ。

「……ありがとう」

そんな事思っているなんて、死んでも悟られたくないから、そっぽを向いたままグラスを返す。と、その手をぱしりと掴まれた。

「何よ」

「何じゃないだろう」

フェルナンドはむっつりとした顔のまま言った。

「主賓がこんな隅で何をしている、一曲も踊りもせずに。お前の為の宴だぞ」

「そんな事言ったってねえ、アタシはついさっきまで一介の市民だったのよ。ダンスなんてした事もないわよ」

「いいから来い」

そばを通った人にグラスを預け、フェルナンドはアタシの手をぐいと引っ張り、大広間の中心へ進んで行った。たちまち周りの人が場所を開ける。

「エエエエ!？」とひるんでいる間にも、楽団が新しい曲を演奏し始める。

ダンスに縁のないアタシでもわかる、これは、ワルツだ。

「俺に合わせていけばいい」

そっけなくそれだけ言うと、アタシの手を取り、フェルナンドは踊り出した。慌てて足を動かしてついてゆく。

最初は、コケないように、フェルナンドの足を高いヒールの靴で踏んづけないように、それで精一杯だったけど。だんだん、相手がどんな動きを求めているのか、わかってきた。

多分、ぎこちないけど。決して上手くはないだろうけど。

アタシはフェルナンドに合わせて、踊った。

さつき男にフラれたばかりなのに、何やってるんだらう、アタシ。そう思つて一人くすりと笑つたら、フェルナンドが怪訝そうな表情をしていた。

そして、曲が終わった。

盛大な拍手がフェルナンドとアタシを包む。今更こつ恥ずかしくなつて、顔が熱くなる。フェルナンドは慣れているらしく、平然としていたけれど。

「素敵、素敵でしたわ、蓮子様！」

リーティアがやってきて、アタシの両手を取る。

「全然！ 全然ダメだよ、フェルナンドがいなかったら、アタシ踊れなかった」

するとリーティアはイタズラっぽく笑つて、アタシに耳打ちした。

「フェル兄様は、滅多に女性と踊ったりされないうです。よほど蓮子様を気に入られたのでしょうね」

「はあ!？」

アイツが!?! アタシを!?

「ある訳ない、ある訳ない。人のこと年増とかレンコンとか呼ぶ性悪王子だよ!」
言いながら振り返ると、フェルナンドはもうアタシたちから離れて、他の招待客と話し込んでいた。

「そうでしょうか? わたくしには……」

リーティアが何か言いかける。そんな時だった。

ずどおおん!

ものすごい衝撃が城を襲ったのは。

5

巻き上がった土煙がしばらく視界をふさいだ。目が痛いのと喉が苦しいのどを必死におさえて、顔を上げたアタシは、しばらく言葉を失って立ち尽くしてしまった。

なにか巨大なモノが突っ込んできたらしい。大広間の壁が崩れている。

パーティーに来ていた客たちの悲鳴が響き渡る中、それがゆつくりと頭をもたげた。

有名RPGに通り手をつけてみるライトユーザーなアタシには、その形容が一発でできた。

人間より五倍以上も大きい、黒の、ドラゴン。

ソイツが、バサアッと背の翼を広げて、ずらりと牙の揃った口を開けて、アタシの姿を見つけると、一声、やたら嬉しそうに吠えた。

あつれい、どうしようか。場違いなくらいノンキにそんな事を考えた時。

「逃げろ」

フェルナンドがアタシの前に立って、腰に帯びていた剣をすらりと抜いた。

「逃げろって、アタシはどうするのよ」

「俺はこの国の王子だ。皆が無事に逃げるまでここで戦う義務がある」

「義務って……勝ち目はあるワケ？」

「無い」

あまりにあつさり言うもんだから、アタシは一瞬、コイツ本当は隠し玉でも持っているんじゃない

いかと疑ってしまっただけだ。

「ただどうやら、真剣な表情で剣を構える姿を見るに、そしてリーティアが「蓮子様、お兄様、お逃げください！」と必死に叫ぶのを聞くに、本当に勝つ算段はないらしい。」

やけにゆったり見える動作で、ドラゴンが大口開けてアタシたちを威嚇する。

どうしよう。

もう一度考えた。今度は深刻に。

リーティアはアタシを、女神アリストリアに選ばれた戦巫女だと言った。それなら、今、今、その力をちょうだいよ、アリストリアとやら！

そう願った瞬間。

『望むなら与えよう、戦巫女よ』

知らない誰かの声と共に、きい……ん、と、アタシの中で何かが弾ける音がした。

わかる。力が、わいてくる。そして、その力をどう使えばいいのかも。

何故か一瞬、アタシをブツたあの男の、オモテヅラのいい笑顔が横切った。

違う！ 今欲しいのは、あのドラゴンをブツた切る力！ ついでにアイツのウソつきな顔も、ブツた切ってやれる力だ！

そう願うと、右手が熱くなる。光が集って。アタシの気分にはピッタリの形を取る。

銀色の、巨大な斧。

全然重さを感じないその斧を、両手で持つて。

「うおりゃああああ！」

乙女にふさわしくないかけ声あげ、コルセットが食い込む苦しさも忘れ、髪の毛が乱れるのもおかまいなしに、アタシは、とん、と床を蹴って。

飛んだ。

文字通り、人間の常識を超えた跳躍力で、飛んだのだ。

そして、一刀両断。

ドラゴンの首はあっけないくらいさつくりと斬れ、血の代わりに黒い粒子を撒き散らしながら、消滅した。

「お見事でした、蓮子様！」

現れた時と同じくらい自然に、斧が光になって消えると、リーティアが興奮した様子で駆け寄ってきた。

「ご降臨されてすぐに、力の使い方を身につけられるなんて！ 歴代の戦巫女様でも、それほどの方はいらっしゃいませんでしたわ！」

「そ、そうかな」

正直言えば、気持ちと身体が勝手に動くのに引きずられていただけのような気もするのだが。少々浮かれていたアタシだったが、リーティアの続けた言葉に、気分がはっと現実に戻った。

「これで魔族が蓮子様を狙って来ても、心配は要りませんわね！」

「……え。ちよい待ち。まさかあんなのがこれからもワンサカやって来るってワケ？」

「何、当たり前的事を言っているんだ」

フェルナンドが仏頂面で答える。

「戦巫女は魔族を脅かす存在。抹殺しようとするのは当然だ」

急に、コルセットの苦しさが蘇った気がした。

「ご心配なさらないでください、我々が全力をもつて蓮子様をお守りいたしますから……！」

「まあ、それが王族の務めだからな。お前もせいぜい簡単にやられないようにしてくれ」

リーティアのフォローも、フェルナンドの嫌味も、遠くに聞こえた。

ぜつつつたい、生きて元の世界に帰ってやる。

そうひっそり決意した、矢田蓮子の戦巫女デビューだった。

当サンプルは、物語序盤です。

この先は、本編でお楽しみください。

『後日談』として、文庫版のみの
書き下ろしエピソードもご紹介します。

七月の樹頼 たつみ 暁

URL:<http://july.main.jp/>

Twitter:tatsumisn